
1. 北海道小麦の歴史

(1) 小麦の歴史－明治～大正時代 －米国からの導入品種が！－

北海道の小麦の歴史は、非常に古く、コムギの栽培は天明年間（1780年代）に試みられたとされています。小麦、大麦、水稲などを植え、稲が実らなかったとの記録が残っています。また、安政年間には根室国野付郡で、本州のオオムギとコムギを栽培し、豊熟するとの報告があります。しかし、本格的に栽培されるようになったのは、黒田開拓使次官が1871年（明4）に、当時の米国農務局長ホラン・ケブロンを顧問に迎え、東京、七重、札幌、根室に官園を開設して、欧米の種苗、機械技術を導入し、その普及に努力してからです。その後開拓使は廃止されましたが、1886年（明19）には北海道庁が設置され、逐次上川、十勝、北見地方へと開拓が進みました。また、開拓と時を前後して、各地で試験場が設置されています。開拓期当初の小麦作は、道南を含め、石狩、空知、上川地方の道央地帯に多く、全体の60～80%を占めていました。

1887年（明20）ころ、数百haの作付けだった小麦面積は、開拓の広がりとともに伸び、1900年（明33）には9,000haにまで増大しました。それが1902年（明35）頃から、これらの地方で造田が盛んに行われ、水田面積が増え、小麦は北や東へと押しやられました。その傾向は大正に入ってさらに強くなり、1920年（大9）には、水田面積は明治時代の7倍までに膨れ上がりました。また1914年（大3）から始まった第一次世界大戦の頃には、輸出農作物価格が高騰し、本道特産のアマ、インゲンマメ、パレイシヨ、エンドウの作付けが増え、小麦が減りました。明治の末に22,000haまで増大した小麦面積は、大正の終わりには8,000haにまで減少してしまいました。

その明治から大正にかけての小麦の品種の変遷について、明治41年に北見

の分場長になられた我孫子孝次さんは、「北海道農業よもやま話」のなかで、感慨深げに個別の品種について触れておられます。明治後期から大正にかけての小麦は、主流品種はアメリカから導入された品種でした。秋まき小麦では、「マーチンス・アンバー」、「ドーソンズゴールデンチャフ」、「赤皮赤」、「白肌」であり、春まき小麦では、「札幌春小麦」で、これらはいずれもさび病を始めとする病害に強く、品質も良く、収量も多かったのですが、稈が長く倒伏しやすいという欠点を持っていました。さらに紹介されていたのが府県品種の「チッコ」でした。開拓当初、新たに開拓された肥沃な土地では、長稈種は栽培不可能だったことから、短稈で茎が丈夫な日本の在来種「チッコ」が普及していました。しかし、無肥料栽培が続くなかで、地力は減退し、「チッコ」では多収がえられず、結局、収量や品質が優るアメリカ品種が栽培されるようになりました。最終的に「チッコ」は消えました。

「マーチンス・アンバー」は1905年（明38）、「赤皮赤」は1906年（明39）、「ドーソン」は1914年（大3）、「札幌春小麦」は1905年（明38）、「ミネソタ163号」は1914年（大3）に、それぞれ優良品種に選定されています。

＜天野 洋一＞